

令和3年度 ICT活用実践研究 実績報告書

所属校園	附属釧路義務教育学校		形態	■ 個人 □ 団体・グループ
研究代表者 (申請者)	氏名		職名	備考(分担等)
	坂下眞美		教諭	
研究分担者 (団体・グループの場合)				
研究題目	小学校外国語活動・外国語における一人一台端末の活用 ～ロイロノートを用いたコミュニケーション活動の実際～			
経費支出内訳				
事項	単価 [円]	員数	金額 [円] (消費税込)	備考 (内訳・特記事項等)
4 極用高感度マイク	1,980	10	19,800	
		合計	19,800	

【研究実績の概要, 得られた成果・効果等】

1. 研究概要

小学校外国語活動・外国語科において一人一台端末を活用することで、子どもたちの「楽しい」を引き出し、子供達同士のコミュニケーションがより豊かになると考える。本研究では、授業支援クラウド「ロイロノート・スクール（以下ロイロノート）」を用いることが、児童同士の十分なコミュニケーションの機会を保証し、「児童が本当に伝えたいこと」を表現することにつながるかどうかを検証していく。

2. 研究目的

AI や IoT 等の先進技術の急速な進展により外国語教育をとりまく環境も急速に変化してきている。そうした社会の変化もふまえ、新学習指導要領では、現状のAIにはできない「コミュニケーションを行う場面、状況等をふまえ、言語の背景にある文化や相手への配慮をしながら、自分が本当に伝えたいことを伝え合い、理解し合う能力の育成」をより一層重視している。

そのため、これまでのような、英語の音声を聞いて繰り返したり、映像を見たりするためのICT活用だけではなく、コミュニケーションのツールとしてのICT活用の方法を考えていくことが重要となる。

文字の読み書きが十分にできない小学校段階の外国語教育においては、具体物の操作等を通したコミュニケーションが必須である。しかし、児童数×数種類の絵カードを使用することも多く、配付と回収に時間がかかってしまい、本来行いたいコミュニケーション活動の時間が十分確保できないという課題がある。また、児童が具体物を見せながら表現したいと思った際に、イラストや教師の印刷したものをを用いることしかできず、「自分が本当に伝えたいこと」を十分に表現することが

できていないという課題があった。

本研究は、授業内で使用するカード等の作成や配付にかかる時間を大幅に削減し、児童同士の十分なコミュニケーションの機会を保証できる端末活用のあり方や、一人一台端末を活用することが「児童が本当に伝えたいこと」を表現することにつながるかどうかを検証していくことを目的とする。

3. 研究方法と期待される効果

ロイロノートを用いて具体物の移動が可能なワークシートを配付し、画面上で具体物を操作しながらやり取りできるようにすることで、効率的に活動を行うことができるようにする。また、ロイロノート上に自分が伝えたいことに関わる写真を追加したり、映像を伝わる順番に並べ替えたりできるようにすることで、「自分が本当に伝えたいこと」を伝えられるようにする。こうした手立てが有効であったかどうか、児童の振り返りの記述をもとに分析をしていく。

このように、一人一台端末を活用することで、子どもたちの「楽しい」が引き出され、子供達同士のコミュニケーションがより豊かなものになると考える。

4. 授業の実際

○やり取りのツールとしての ICT 活用

単元名：Unit5 Where is the post office? (NEW HORIZON Elementary 5)

本単元では、ペアでインフォメーションギャップのあるワークシートを配付し、情報を聞き合うことで自分のワークシートを完成させていく活動を行った。教師はロイロノート上で1枚の部屋のイラストに、10個の物のイラストを貼り付け、2種類のワークシートを作成した。ロイロノートの「ピン留め」機能を使用し、移動させたくない重要な情報にはピン留めをしている（ ）。また、部屋のイラストの下部分にはどこに置いたらよい 分らないカードを置き、好きな場所に移動できるようにしている。児童Aは「Where is the ○○?」と、置き場が分からないカードの場所を児童Bに尋ね、児童Bは「It's on the table」と答える活動を交互に繰り返す。

これまで、紙媒体でもインフォメーションギャップのある活動を行ってきたが、素材カードを配付することに時間がかかってしまったり、文字で書く場合、スペルが分からないことで書くことに時間が取られたりしてしまうことが多かった。児童の振り返りの記述にもあるように、ロイロノートを用いることで、準備や操作が容易となり、複数回活動を行うことが可能になった。紙媒体で行っていた際は、授業のメイン活動として位置づけることが多かったが、授業の導入として行い、単元のゴールに向けた活動に十分な時間を割くことができるようになった。




単元名 : Unit8 Who is your hero? (NEW HORIZON Elementary 5)


本単元では、頻度を表すカードを当てはめて自分の日課を表現したり、友達の日課や誕生日を手がかりにして誰のことを言っているか予想したりする Who am I?クイズを行った。Unit5 での実践同様、ロイロノート上で「頻度を表すカード」を自由に移動できるようにしている。Sometimes, always 等は抽象的な言葉で児童にはあまり馴染みがないため、イメージできる絵カードを用いている。また、絵カードには音声で音声を吹き込んでいるため、カードを押すだけで音声の確認をすることが可能になっている。(右側の児童の振り返りの記述を受けて、音声で確認できるカードに変更)

また、絵カードを用いて振り返りの記述をする姿も見られた。

サイコロトークの時間が短かったけど、今日もコンプリートできた。



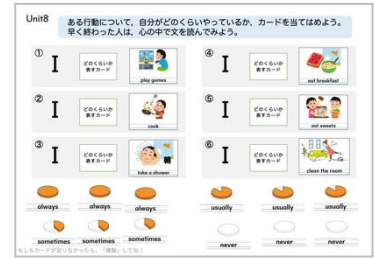
always



never

この2つの言葉に注目すると、誰のことを言っているのかが分かりやすかった。

どのくらいやるかの言い方はわすれたのがあったけど、絵をみて当てはめることはできた。次は言い方も練習したい。



○よりリアルな場面設定を可能にするツールとしての ICT 活用

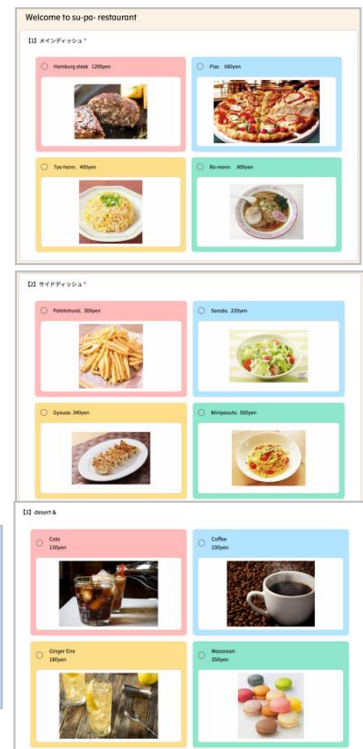
単元名 : Unit6 What would you like? (NEW HORIZON Elementary 5)

本単元では、グループで経営したいレストランを考え、自分達でメニューや値段を設定し、英語で注文し合う活動を行った。メニュー表はロイロノートの「アンケート機能」を使って作成している。ここで大切にされたことは「よりリアルなお店でのやりとりに近づける」ということである。端末を使用することで、メニュー表を簡単に作成することができるだけでなく、魅力的な写真を使用したり、教科書にある単語だけに限られない活動を行うことが容易になったりする。

これまでは手書きのイラストや巻末の絵カードを用いていたため、メニューの作成自体が目的になってしまうことが多かったが、児童の振り返りの記述にもあるように、目的・場面・状況や伝えたい相手を意識して、作成したものを使ってやりとりをすることに重点を置くことができている。

家族で来てもらえるようなレストランにしたので、値段もお手ごろにしました。みんなで手分けして美味しそうな写真を探しました。次の授業でたくさん注文してもらえるように、注文を読む練習もがんばりました!!!


私は甘いものが好きなので、スイーツレストランで注文をしました。食べたことのないスイーツがあって、注文しすぎてお金が足りなくなりました。みんな本当のお店みたいにすぐ考えていてすごいと思いました。



○より効果的な伝え方を考えるツールとしての ICT 活用

単元名 : Unit7 Welcome to Japan. (NEW HORIZON Elementary 5)

本単元では、日本とは季節が異なるフィリピンの人達に、日本の四季の魅力を伝えるビデオレターを作成する活動を行った。これまでもビデオレターを作成するような授業実践は多く報告されているが、ロイロノートを用いることで、「映像の並び替え」をしながら構成を考えることが可能になる。右の写真のグループは5つの動画を撮影し、伝えたいことがより伝わる順序を考えることを繰り返し、動画作成を行っていた。



前回と少し変えて、動画の順番を入れかえてみました。(4つの季節を先にしました) グループでは、今日の方が分かりやすいという話になりました。声の大きさがバラバラなので、次回少しだけ撮影し直しがあります。

また「動画に字幕をつけたい」という児童からの要望があったため、Apple 純正の無料アプリ「Clips」を使用して字幕をつける活動も行った。動画作成だけでなく、自分の発音が正しく伝わるかを確認するためのツールとしても有効である。このグループでは「字幕があった方が分かりやすい」という理由から Clips を使用したが、アプリを使う中で「自分たちの原稿と、出てきた字幕が違うけれど、どう発音したらいいのだろうか？」とグループで試行錯誤を繰り返す姿もみられた。



字幕があった方がいいよねという話になって、字幕を入れるアプリを使った。最初ヘンテコな文が出てきて爆笑。やっぱり字幕があった方が分かりやすいと思う。

児童の振り返りの記述にある通り、このグループは冬の楽しみの一つとしてワカサギ釣りを伝えようとしていたが、英語での言い方が難しいため、「Wakasagi fishing」という日本語を混ぜた形で伝えることにしていた。しかし、この言い方では伝わらないというグループでの話し合いの結果、「動画に写真を入れることでイメージしてもらえようようにしよう」という結論



ワカサギの言い方が何回やってもむずかしかったから、写真をつけて教えることにしました。きっと伝わると思います。今日は声の大きさも気をつけました。

になり、あとから編集で写真を付け加える様子が見られた。このグループは、Apple 純正の無料アプリ「iMovie」を使い、動画上に写真を入れたり、字幕を入れたりしながら、初めて聞く単語でも分かってもらえるような工夫を行っていた。本単元では、「ロイロノート」「Clips」「iMovie」の中から、自分たちが伝えたいことがより効果的に伝わる編集ソフトを選択した活動できるようにした。中間交流会で他のグループが様々な工夫をしていることを知り、そのよさを取り入れようとする姿も多く見られた。

5. 成果と課題

本研究は、授業内で使用するカード等の作成や配付にかかる時間を大幅に削減し、児童同士の十分なコミュニケーションの機会を保障できる端末活用のあり方や、一人一台端末を活用することが「児童が本当に伝えたいこと」を表現することにつながるかどうかを検証していくことを目的としていた。

端末導入前は、ワークシートや絵カードの配付と回収に時間がかかってしまい、本来行いたいコミュニケーション活動の時間が十分確保できないという課題があった。しかし、児童の振り返りの記述からも分かる通り、画面上での容易で直感的な操作により、活動に集中して取り組むことが可能となった。

また、これまでは児童が具体物を見せながら表現したいと思った際に、イラストや教師の印刷したものをを用いることしかできず、「自分が本当に伝えたいこと」を十分に表現することができていないという課題があった。しかし、端末を用いることでウェブ上の写真から自分が表現したいものに合うものを選択したり、自分の考えがより伝わるように様々なアプリを用いて表現したりすることが可能となった。

このように、一人一台端末の導入により、子供達同士のコミュニケーション活動が豊かになったことを感じる一方で、様々なアプリの使用方法について「いつ」「どのように」指導していくかについては課題が残る。こうしたアプリは外国語活動・外国語科だけで用いるものではないため、全ての児童が同じように使えるように、系統的に技能を習得していける方法を考えていきたい。